異聞逸聞

数々の思い込み

八杉佳穂（やすぎよしほ）　民博 民族文化研究部

民博は神聖なる修行の場である

民族学者は人とのつきあいが大切だからか、創立当初のエネルギーのなせるわざからか、一九八〇年着任当初は、パーティがよくあった。仕事をするところは、修行のおこなわれる神聖な場と思い込んできたのだが、神聖な場というのは思い違いであった。しかし民博をパライッソ（楽園）と言った外国人研究者がいたが、自由に研究ができるまさに理想の場であった。さらに、民博の研究者は世界をカバーしており、世界中の情報が自然と入ってきたし、聞けばなんでも簡単に知ることができるじつにいいところであった。自分は人前恐怖症で、人前に出て話をするなんてとてつもなく恥ずかしくかつ恐ろしくて、学問による修行でしか克服できないと思い込んでいたが、まわりに鍛えられたお蔭（かげ）か、人前に出ることもだいぶ気にならなくなり、楽に生きられるようになった。

サラリーマンと思いきかせる

直属の第四研究部長であった加藤九祚先生は九時から五時まで働いて、それ以降は酒を飲む主義を貫かれていた。「継続は力だ」を身をもって示しておられた。学者というのは、やるときはやって、やらないときは抜け殻のようになるのをイメージしていたが、サラリーマンのごとく毎日規則正しく民博に来ること、週五十時間、年二千時間は超えること、これを言い聞かせた。土曜日が休みになり、民博滞留時間はだいぶ減ったが、お蔭で、不健康であった体は丈夫になり、体重は三〇キロも増えた。

中米を任されている

中米を任されているからには、中米の標本資料や図書資料はできる限り集めなければならないと思い込み、四度も海外収集に出かけた。民族資料はがらくたであるという梅棹初代館長の言をたてに、自由にものを買い集めることができた。人が使うものはすべて本物であるので、鑑定が不要である。その気楽さと引き替えに膨大な量を扱うことになった。マヤ学を始めたものの、その業績は心許ないが、標本資料と図書資料は、世界で有数の博物館になったことはまちがいないであろう。

特展はやらねばならない

博物館に勤めている限り、常設展の充実はもちろん、特別展もやらなければならない。そう思って一九九五年に「現代マヤ――色と織に魅せられた人々」という特別展を開催した。それでやめとけばいいのに、民族学のために集められた三〇万点を超す資料が死蔵されているようでもったいなく、利用法を考えているうちに思いがつのり、「千家十職×みんぱく――茶の湯のものづくりと世界のわざ」展（二〇〇九年）をすることになった。協力してくれる人がたくさんいたお蔭で、無事やり遂げることができ、人のありがたさをしみじみ感じたが、二度とも展覧会終了後、深刻な手術を受けなければならなかったのは、自分に向いていないことをやったせいに違いなく、命にかかわる大きな思い違いであった。

自分はフィールドワーカーではなく、文献言語学者である

フィールドワークというのは、村に入って、村人と共に生活して、あらゆるものを調べることだという思いが強かったので、あるとき同僚の言語学者が、言語資料はホテルにインフォーマントを招いて集めるのだということを聞いて驚いた。これはいい。危機言語の大調査に同じような調査法を使うことにした。そのお蔭で四巻の資料を作成できた。

わたしは内に向かう人間なので、フィールドワークに向いていない。文献を読むことも苦手である。だから学問は修行と思ってきたのだが、民博にいることができたお蔭で、ふつうでは経験できそうもないことをたくさんやらせてもらえた。

思い込み、思い違いを題材に民博三四年半を振り返ってみると、いろいろなことがまだまだ浮かんでくる。在任中は思い違いで過ごしてきたとさえ思えてくる。体力が衰え、頭脳も衰えていくばかりであるが、まだやり残していることがたくさんある、という思い込みが、衰えていく終末を元気にしてくれるに違いない。

グアテマラのコンセプシオン・チキリチャバで出会ったこの女性は、変わったウィピルを着ていたので、是非譲ってくれと頼むと、脱いでくれた。するとスカートで見えなかった部分に、なんと種まで描いたスイカが織り込まれていた。こんなにできる織り手は見たことがない。1993年。
標本番号 H195577

1995年の特別展「現代マヤ――色と織に魅せられた人々」にて

2009年の特別展「千家十職×みんぱく――茶の湯のものづくりと世界のわざ」の一風景

1995年の特別展「現代マヤ――色と織に魅せられた人々」の一階正面部分

カクチケル語の調査で協力してくれたフアン君とバイロン君とともに。2011年